

産肉性が優れた「名古屋コーチン」の肉用新系統の開発

～愛知が誇るブランド鶏「名古屋コーチン」の生産を支えます～

長尾健二（農林水産部畜産課

前・農業総合試験場畜産研究部養鶏研究室）

【平成29年6月15日掲載】

【要約】

岩手県で保存されていた血縁の遠い「名古屋コーチン」を素材として導入し、肉用系統「NGY3」に代わる、新系統の開発に取り組んだ。

開発した「NGY7」は、従来の「NGY3」に比べ、産肉性が優れており（250日齢の体重 雄4.0kg→4.4kg、雌3.2kg→3.7kg）、生存率も向上（150日齢の生存率95.2→98.9%）した。この「NGY7」を雄種鶏に利用すると、農家で飼養される肉用名古屋コーチンの生産性向上が期待できる。

1 はじめに

「名古屋コーチン」は、愛知県が誇るブランド鶏として全国的に知名度が高く、全国の地鶏の中で唯一、他の品種と交配せずに純粋種のまま利用されている。

愛知県では、明治36年から「名古屋コーチン」の系統開発に取り組んでおり、これまでに肉用2系統（NGY2、NGY3）、卵用3系統（NGY1、NGY4、NGY5）を開発してきた。開発した系統は、愛知県畜産総合センター種鶏場で維持・増殖され、民間孵化場に供給している。

これらの系統は、開発後、維持している期間中の近親交配により発育能力などが次第に低下してくることから、新たな系統に順次更新していく必要がある。このたび、現在の肉用系統「NGY3」に代わる、発育がよく産肉性に優れた新系統の開発を完了したので紹介する。

2 育種経過

平成16年度に、愛知県が保有する「名古屋コーチン」と遺伝的に離れた育種素材として、岩手県農業研究センター畜産研究所が保有していた「名古屋コーチン」を導入し、愛知県の現在の肉用系統「NGY3」に変わる、新系統の開発を開始した。

その後、集団の中から増体に優れるなど能力の高い個体だけを選抜し交配を繰り返し、11世代を経て、平成29年に開発完了となった。

3 「NGY7」の特徴

「NGY7」の特徴は2つある。一つ目は、発育が良く産肉性に優れている。平成3年に開発した「NGY3」と比べ、成鶏時の体重が雄と雌ともに10%以上が向上（250日齢の体重 雄4.01→4.44kg、雌3.17→3.73kg）している（図1）。

二つ目としては、丈夫で飼育環境の変化などのストレスに強く、生存率が高いことである。「NGY3」は開発されてから20年以上が経過しているため、近親交配により生存率が低下（150日齢の生存率98.5→95.2%）してきたが、「NGY7」は「NGY3」

に比較して3.7%（150日齢の生存率95.2→98.9%）高くなっている（図2）。

これらの特徴を持ったNGY7を雄種鶏として利用すると、生産農家で飼育されている肉用名古屋コーチンの体重が大きくなり、養鶏農家の収益向上と鶏肉の流通量増加が期待できる。

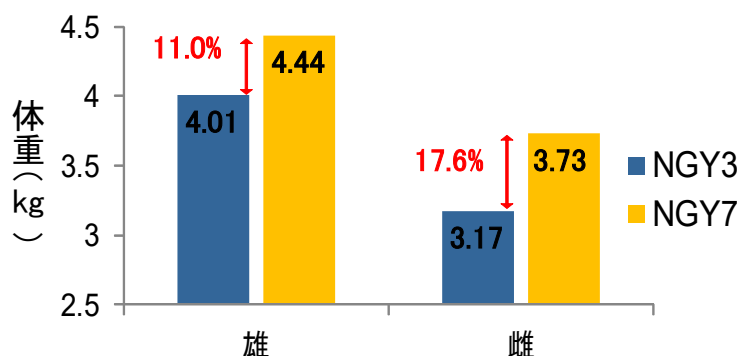


図1 成鶏時（250日齢）の体重

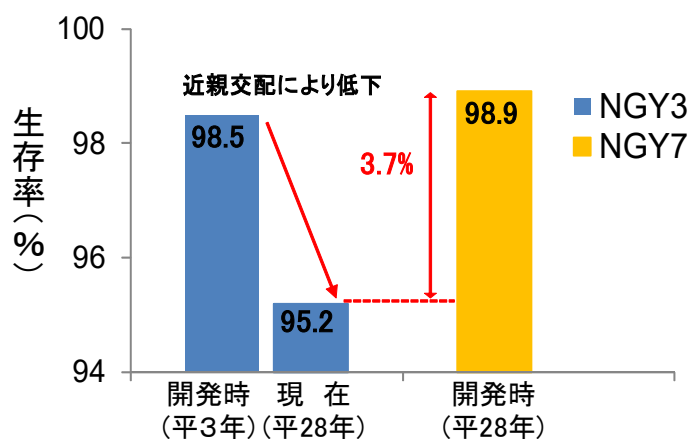


図2 育成時（150日齢）の生存率

4 今後の予定

開発した「NGY7」は、平成29年5月に畜産総合センター種鶏場へ移管後、平成30年春から民間孵化場に「NGY7」の雛が種鶏として供給される。

その後、民間孵化場から養鶏農家へ「NGY7」をかけ合わせた雛（実用鶏）が供給され、平成31年夏ごろには、「NGY7」を用いた名古屋コーチンの鶏肉が出荷される予定である。



写真 完成した「NGY7」雄と雌